



医学部長就任のご挨拶 平成 31 年 4 月 1 日付

超高磁場 MRI 診断・病態研究部門 教授 **佐々木 真理**

圭陵会の皆様におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

この度、佐藤洋一前医学部長の後任として医学部長を拝命いたしました。改元および附属病院移転という節目の年に、このような大役を仰せつかり身の引き締まる思いです。微力ながら全力で職責を果たしてまいりたいと存じます。

現在本学には様々な課題が山積していますが、中でもここ数年の医師国家試験合格率の低迷は極めて深刻な問題であり、危機的状況と考えています。医学教育は大きな変革期を迎えており、医学教育分野別評価では国際基準の質保証が求められています。専門科目を低学年で集中履修し、コンピュータ共用試験（CBT）や客観的臨床能力試験をクリアし、診療参加型臨床実習と国家試験対策としての座学を両立させ、競争試験と化した医師国家試験に突破せねばならない学生の負担は大きく、戦略的な学修支援体制無しには国家試験合格率の向上を成し遂げることはできません。

これまで佐藤前医学部長の陣頭指揮の下、学生教育の充実と改善が全力で進められてきましたが、さらなる短期的・中期的・長期的な多角的取り組みが必要と考えます。現在、圭陵会の先生方から頂戴した多くのご助言や励ましを糧とさせていただきながら、全学教育推進機構長・副学部長・教務委員長・教務委員会・医学教育学講座・教授会などが密に連携し、様々な教育改革を進めています。高学年では、留年経験者を主体とする成績不良者の学修支援のため、新たに学修支援委員会を設置し、臨床実習期間中の国家試験対策少人数教育を強化するとともに、卒業試験および国

家試験直前の個別支援対策の改善や既卒者対策に積極的に取り組んでいます。CBT 対策が極めて重要な中学年では、以前より CBT 委員会を中心に精力的に取り組んできましたが、CBT の成績が近年明らかな向上傾向を示し、全国平均を上回っている点は大きな光明と思われまます。低学年では、生活習慣や学習態度が国家試験の合否に直結していることが教学機関調査（IR）によって示されており、生活指導体制を充実させるとともに、試験内容や進級要件の適正化を進めています。一方で、医歯薬看 4 学部が同じキャンパスで共に学ぶ強みを生かした多職種連携教育（IPE）などを通し、チーム医療を担う医師としての自覚を早期に醸成することも極めて重要と考えています。

卒業教育に関しましても、高等教育・研究改革イニシアティブによる大学院改革が喫緊の課題であり、新専門医制度、医師の働き方改革などと相まって難しい舵取りが求められています。学位と専門医の早期取得をサポートする卒業教育体制の整備を積極的に進めていきます。

附属病院移転がいよいよ本年 9 月に迫り、その準備が着々と進んでいます。この大事業を円滑に進め、矢中新附属病院と内丸メディカルセンターを順調にスタートさせるには、教職員の力の結集が不可欠です。医学部教職員一同が一丸となってこの難局を乗り切り、国家試験合格率を向上させ、誠の人間として厚生済民に尽くすことができる優れた医療人を育成していく体制を構築していく所存です。今後とも圭陵会の皆様のご助言とご協力を心よりお願い申し上げます、就任の挨拶とさせていただきます。



教授就任のご挨拶

平成 31 年 4 月 1 日付

医学部

教育学講座医学教育学分野 教授 田 島 克 巳

圭陵会の皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたび平成 31 年 4 月 1 日付けで、岩手医科大学医学教育学講座医学教育学分野教授を拝命いたしました。医学教育学講座は医学教育の改革という社会の要求の流れに沿い、体系的に教育を進める仕組みを構築することを目的に平成 25 年 10 月に新設され、佐藤洋一教授が初代教授に就任され、私は医学教育学分野の 2 代目になります。医学教育学分野は、将来の医学教育の方向性の情報を収集し、世界基準の教育システムを提案し構築していくという役目を担っているということでその重責に身の引き締まる思いであります。

私は、愛知県名古屋市の出身で、昭和 59 年に岩手医科大学を卒業しました。卒業後は本学の整形外科に入局し、大学院では第 2 解剖(現在の細胞生物学分野)で井出教授の指導の下、筑波の霊長類センターに通い、カニクイザルの尺骨神経を用いて、同種移植による末梢神経の再生についての研究を行いました。大学院修了後も、井出教授の研究のお手伝いで犬山の京都大学霊長類研究所や京都の科研製薬総合研究所に通い、サルやビーグルで神経移植の手術をさせていただきました。この経験を生かして、手外科、末梢神経外科を専門として平成 26 年 3 月まで本学の整形外科に勤務して参りました。

そのような中、平成 25 年 10 月に本学に医学教育学講座が新設され、初代教授の佐藤洋一教授にお声をかけていただき、平成 26 年 4 月に医学教育学講座に異

動いたしました。当時、日本の医学部は WFME (世界医学教育連盟) の国際認証 (実際は WFME からメタ認証を受けた日本医学教育評価機構による評価) を受けることが求められるようになっており、医学教育学講座の使命は、その情報を収集し、本学の医学教育を国際基準に則った内容に適合させることでした。その中で私に与えられた使命はカリキュラムの改変と新しい教育の考え方の学内への浸透でした。そこで、4 年をかけて、臨床実習期間の延長と技能・態度を含めた形成評価と総括評価の導入、基礎医学と臨床医学を統合した垂直統合カリキュラムの導入、ディプロマポリシーに合致した卒業時コンピテンシーの作成を行い、これらについては昨年 11 月の分野別評価で高い評価を受けることができました。一方で、教育・評価に関して 10 項目以上にわたる改善点をご指摘いただきました。それらを総括すると、アウトカム基盤型教育としてまだ不十分という指摘ととらえています。

医学教育学分野の 2 代目の教授として私に与えられた使命は、佐藤教授の築き上げた基盤を継承するとともに、最新の医学教育に関する手法を本学に適した形で導入しながら、国際基準に適合し、かつ国家試験の成績改善に寄与できる教育カリキュラムを構築することによって、多くの良医を輩出していくことと考えております。今後も、微力ではありますが、本学のさらなる発展に貢献できるよう努力して参りますので、圭陵会の先生方には、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



教授就任のご挨拶

平成31年4月1日付

医学部

内科学講座血液腫瘍内科分野 教授 伊藤 薫 樹

圭陵会の皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。平成31年4月1日付けで、岩手医科大学医学部内科学講座血液腫瘍内科分野の教授を拝命致しました。本学内科学講座の一分野を担当させていただくことは身に余る光栄でありますとともに、その重責に身の引き締まる思いであります。

私は、平成3年に本学医学部を卒業後、旧内科学第三講座に入局するとともに、附属病院の臨床研修医として研修を開始致しました。田村昌士元教授および故厨信一郎教授のご指導の下、附属病院および関連病院で呼吸器疾患や血液疾患の診療に従事し、論理的思考に基づいた診断や病態把握による徹底した診療姿勢を学びました。平成6年から血液部門に所属し、血液疾患の診療や研究に専心して参りました。平成13年にフローサイトメトリー法を用いた白血病微小残存病変の評価法の開発により学位を取得いたしました。平成16年から2年間、米国インディアナ大学医学部微生物免疫学講座に留学する機会をいただき、造血幹細胞の増殖機構やホーミング研究で有名な Broxymeyer 教授の指導の下で分裂期チェックポイント分子 *Mad2* 遺伝子のノックアウトマウスを用いて造血幹細胞の増殖機構の研究を行いました。現在の私にとって貴重な財産のひとつとなっております。帰学後、平成20年には内科学講座血液・腫瘍内科分野が新設され、教育、診療、研究の研鑽を積んで参りました。翌年には腫瘍センター副センター長を拝命し、院内の安全かつ確実

な標準化学療法を実施するための取り組みとして、レジメン審査委員会の立上げやレジメン登録の推進、チーム医療の推進を行ってきました。平成22年にはがん薬物療法専門医資格を取得し、造血器腫瘍のみならず原発不明がん・悪性軟部腫瘍・甲状腺がんなどの固形がんの診療を行っております。平成27年1月には腫瘍内科学科の教授を、平成28年4月には腫瘍センター長を拝命し、がん医療のより一層の充実を図って参りました。平成29年4月からは臨床腫瘍学講座の初代教授として腫瘍学教育やがん診療の新たな体制を構築して参りました。

これまでの経験を十分に活かし、血液内科学教育を充実させ、一人でも多くの血液専門医やがん薬物療法専門医を育成し、岩手県内および関連施設におけるがん診療の質の向上を図って参ります。また、岩手県内で唯一の同種造血細胞移植が行える施設としての責務を果たす所存です。また、研究面では多発性骨髄腫の新規治療法の開発や薬剤耐性メカニズムの研究を行って参りました。リサーチマインドを持った血液内科医を育成しつつ世界に発信できる研究を推進していきたいと思っております。

もとより浅学非才の身ではありますが、本学および附属病院の発展のために最大限の努力をいたす所存ですので、圭陵会の皆様にはより一層のご指導、ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



教授就任のご挨拶

平成 31 年 4 月 1 日付

医学部

内科学講座神経内科・老年科分野 教授 前田 哲也

2019年4月1日付け、内科学講座神経内科・老年科分野の教授を拝命いたしました、前田哲也（まえだてつや）と申します。圭陵會の皆様、会報誌上から大変恐縮ではございますが、自己紹介と就任のご挨拶を申し上げます。

私は平成5年に弘前大学を卒業し、武部和夫教授の主宰する第三内科に入局して臨床研修を開始しました。同時に、松永宗雄教授のご指導の下、臨床神経学の研修と脳神経疾患研究施設臨床神経部門の大学院生として学位の研究も開始しました。はじめの2年間は臨床研修に重きを置き、多くの症例経験を積ませて頂きました。その臨床経験に基づいた視点から、パーキンソン病の基礎研究で学位を取得致しました。カテコラミン神経毒を用いてパーキンソン病モデルラットを作成し、in vivo マイクロダイアリシス法を用いて線条体でのドパミン放出を測定することでパーキンソン病の病態および治療の研究を行いました。私の学位論文になったのは、シナプス前D2受容体によるドパミン放出調節機構を検討した仕事です。当時はパーキンソン病治療にドパミンアゴニストが第一選択薬として用いられた全盛の時代であり、ドパミンアゴニストのパーキンソン病治療における効果発現機序に関する研究でした。2001年には滋賀医科大学第一解剖学講座、新井良八教授にも師事する機会を得て免疫組織学を学び、私の研究生活のターニングポイントとなりました。2003年4月からは秋田県立脳血管研究センターに赴任致しました。24時間体制の脳卒中急性期診療に携わるとともに、外来診療ではパーキンソン病やアルツ

ハイマー病など神経慢性疾患を数多く担当しました。臨床試験の責任医師、分担医師、医学専門家といった立場で様々な経験を積ませて頂きました。また基礎研究も継続して、私の代表的な研究成果である、縫線核線条体系セロトニンニューロンによる外因性レボドパからドパミンへの合成機序を示すエビデンスを積み重ねられたのはまさにこの時期でした。

2016年4月当教室の前任、寺山靖夫教授に声をかけて頂いて、特任准教授として生来初めてとなる盛岡に単身、赴任致して参りました。大学ではパーキンソングループを任せられ、初年度2名だったグループも3年経って7名になりました。私が苦もなくスムーズに岩手医大の神経内科に溶け込むことができたのは、教室を主宰されてきた寺山靖夫教授を筆頭に、教室の諸先生方やスタッフの皆様のお人柄のおかげに他なりません。神経疾患に対する真摯で研究心をもった姿勢や、フレンドリーな雰囲気がとても魅力的な教室です。2019年4月、平成最後の春を迎えるこの時期に、また新たな職責を担うこととなって、その重圧をひしひしと実感する日々を過ごしております。岩手医科大学は今年、矢巾町に新病院を移設いたしますが、新たな病院となっても、当教室の気風を維持しつつ気概ある教室員と共に取り組んで、臨床研究、基礎研究、さらに地域医療にもしっかりと貢献して参ります。圭陵會の諸先生方のお力添えも賜りながら取り組んで参りたいと考えておりますので、ご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



教授就任のご挨拶

平成31年4月1日付

圭陵会の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。平成31年4月1日付けで、放射線医学講座の教授を拝命いたしました。放射線医学講座は昭和12年5月に開設された80年余の歴史を有する伝統ある教室で、私で5代目となります。初代の足澤三之助教授は教室の基礎を築くとともに、平泉藤原氏のミイラのX線学的研究や温泉医学等の多岐にわたる分野で多くの業績を残されました。2代の柳澤融教授は放射線治療学の権威で、がんに対する放射線療法や温熱療法の導入と普及に功績を挙げられました。3代の玉川芳春教授はわが国の放射線診断学の草分け的存在で、神経放射線領域を中心に血管造影(IVR)、CT、MRI等を用いた画像診断の基盤を固めると同時に、臨床面で活躍できる人材の教育にも力を注がれました。4代の江原茂教授も放射線診断学が専門ですが、骨・軟部領域に造詣が深く、国際的にもこの領域をリードされるとともに学会活動にも精力的に取り組まれました。私は本学の昭和60年の卒業(医学部34期)で、柳澤融教授の元に入局いたしました。その頃は、足澤三之助教授も岩手リハビリテーション学院院长としてご活躍されており、私のような若輩に対してもたびたび時間をさいて御指導を頂きました。

このような歴史のある教室の舵取りという重責を担

医学部放射線医学講座 教授 吉岡邦浩

うことになり、身の引き締まる思いです。幸いにも、初代から4代までの先生方に直接御指導を頂きましたので、その教えを胸に自分なりの工夫を加えて教室を運営していきたいと考えております。私は、玉川教授、江原教授と同じく放射線診断学を専門としておりますが、特に心臓血管領域を得意としています。これを核として、診療・教育・研究面でバランスの良い教室を目指したいと思います。

私が考える放射線科の任務は、画像診断やIVRを通して各診療科、ひいては病院全体の医療の質の向上に貢献することと考えています。矢巾新病院にも最新鋭の画像診断装置を揃えて頂きました。これらの装置の性能を最大限に引き出し、診断や治療に役立つ画像情報を提供すべく教室の力を結集して取り組んでまいります。その一方で、岩手県を含む北東北3県の放射線診断医の数は、全国的に見ても圧倒的に不足しているのが現状です。一人でも多くの優秀な専門医を育てることが私のもう一つの責務と考えております。

もとより浅学非才の身ではありますが、圭陵会の先生方のお力をお借りしながら、母校である岩手医科大学の発展に少しでも貢献したいと考えております。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



教授就任のご挨拶

令和元年5月1日付

統合基礎講座 解剖学講座 機能形態学分野 教授 藤原尚樹

圭陵会の先生方におかれましては、ますますご健勝の事とお慶び申し上げます。さてこの度、私は令和元年5月1日付けで統合基礎講座・解剖学講座機能形態学分野教授を拝命いたしました。ちょうど平成から令和に変わるタイミングで辞令を頂き、また創立120周年記念事業であります矢巾新病院開院という本学にとりましてさらなる飛躍を遂げようとしている年に教授に就任し、責務の重さに身の引き締まる思いです。

私は岩手県盛岡市に生れましたが、家族の事情で一端盛岡を離れ、大学は筑波大学第二学群生物学類に入学致しました。大学時代は卒業研究ため1年半を長野県にある筑波大学菅平高原実験センターで過ごすこととなり、研究ばかりでなく標高1300mと言う高地での貴重な体験もさせて頂きました。その研究室の繋がりから、偶然にも故郷盛岡にある岩手大学大学院へ進み、学部時代から行っていた昆虫を材料に発生学の研究を発展させる事ができました。さらにこの研究室と本学歯学部解剖学講座との間で交流があったご縁で研究補助という本学との最初の接点を頂き、結果助手として勤務する事となりました。お世話になった先生方のご縁でさまざまな経験をさせて頂くことができ、私にとって貴重な財産となっております。その後、私は歯学部学生への組織学の教育を担当する傍ら、名古屋大学人体解剖学トレーニングコースに参加させて頂いたり、マクロからミクロまでの人体の構造や機能に対する教育について研鑽を積む事ができました。本学に新設された看護学部で基礎解剖学を担当させて頂く機会も頂く中、発生物学・再生医学分野、機能形態学分

野、ならびに当分野の准教授を経て、このたび教授を拝命する事となりました。

研究については一貫してマウス臼歯歯胚の歯根形成機構の解明に取り組んでおります。口腔内に見える歯冠の発生は、顎骨の中で進みます。歯根が形成される時期の歯胚周囲は硬組織に囲まれた状態で、好適な実験系の構築が難しく、歯根形成メカニズムは未解明部分が残っておりました。そこで私はオリジナル器官培養系の開発から研究をスタートし、Hertwig上皮鞘(HERS)細胞株の樹立、歯胚の腎被膜下移植、分子生物学的な研究手法を組み合わせた実験系を構築しました。この系を用いる事によって、歯根形成を誘導する上皮、HERSや構成細胞の特性の解明やこの分化に関わる成長因子の作用メカニズムの解明が簡便となりました。HERS形成と共に受容体の発現が見られるIGF-IがHERS伸長を促進する一方で、セメント質形成の促進因子としても働くなど発生時期依存的な機能を持つ事や、その他EGF、HGFなど幾つかの成長因子の役割を報告してきました。今後もこの研究を継続すると共に、本学でも体制が整えられつつあるCadaver Surgical Trainingをより効率的に進める為のサポートにも務めて参りたいと考えております。

まだまだ未熟ではありますが、教育・研究共にひとつひとつに誠心誠意務めて参る所存ですので、圭陵会の先生方におかれましては今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくごお願い申し上げます。



教授就任のご挨拶

令和元年5月1日付

医学部

臨床腫瘍学講座 教授 板持 広明

圭陵会の皆様におかれましてはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、令和元年5月1日付けで岩手医科大学医学部臨床腫瘍学講座教授を拝命いたしました。これもひとえに、皆様のご厚誼の賜物と深く感謝いたしております。

私は平成2年に鳥取大学医学部を卒業後、同学の産科婦人科学教室に入局いたしました。国立米子病院で初期研修を行った後、平成5年に鳥取大学大学院に入学し、子宮頸癌における動注化学療法の基礎的検討を行いました。三原赤十字病院で2年間勤務し、帰局後は主に婦人科がんの治療について研鑽を積むとともに、若手医師の指導にも力を注いでまいりました。一方研究面では、「抗がん剤耐性機序の解明とその克服」を主たるテーマとして基礎的検討を行いました。また、平成14年から2年間米国のM.D. Anderson Cancer Centerに留学し、がんの遺伝子治療について学びました。帰国後は、鳥取大学の講師、その後准教授として学生の教育や附属病院の診療に従事いたしました。

本学へは、平成27年7月1日に医学部産婦人科学講座教授としてご承認いただき、赴任いたしました。当初は不安も大きかったのですが盛岡は非常に住みやすい街で、何より人柄がとても優しくすぐに慣れることができました。診療面では、ロボット支援下内視鏡手術を導入し手術の低侵襲化に努めるとともに、がん化学療法に関する国内外の大規模な臨床試験にも多数携わってまいりました。教育面では、医学科第5、6

学年のクラス副担任を拝命し、平成30年には医学部ベストティーチャー賞を受賞いたしました。また、基礎研究の環境を整備し研究室を立ち上げ、大学院生の指導にも取り組みました。

臨床腫瘍学講座は平成29年4月に新設され、伊藤薫樹初代教授のご尽力で発展してまいりました。その診療領域は幅広く、原発不明がんをはじめとする様々な臓器の固形腫瘍や血液悪性疾患に対して、がん薬物療法を中心とした治療を行っております。治療に際しては、臓器横断的な視野を持つことが肝要であり、各領域のがんの知見を有機的に結合して安全で効果的かつ質の高いがん医療の提供が最も大切であると考えております。このためには、各診療科との連携や多職種が参加するカンサーボードミーティング等によるチーム医療の推進が必要です。また、これまで取り組んでまいりました難治性がんに対する新規治療法の開発や、がんゲノム医療に照準を定めた基礎的ならびに臨床的研究を継続していくとともに、学生や若手医師に対してはがん診療に興味を抱かせるように、先進的で幅広い教育をしていく所存です。

矢巾新附属病院の開院に向けて、岩手県内外のがん医療水準の均てん化とがん診療の集約化を図るとともに、臨床腫瘍学講座をさらに活気付け、ひいては本学のさらなる発展のために尽力していきたいと考えております。これからも、圭陵会の皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。